

三島神社の移転と 鏡ヶ池の埋め立ては

天理教始まって以来の大失敗！

一教会長が書いた憂教の書

このままでは天理教は滅びる

天理教は宗教では無くなった

平成十一年四月九日記

天理教市港分教会

会長 中澤 忠 喜

平成十一年三月二十六日、私は所用があつておちばの月並祭に参拝出来なかつた。そうしたら、私の親しい友人が、三月におちばで起こった大変な出来事について、八枚の写真付きで様子を伝えて来てくれた。

それは、何と、天理教教会本部神殿の東側に隣接する元の三島神社の宮池であつた鏡が池を、天理教教会本部が自らの手で九分通り埋め立て、しまったと言う知らせであつた。

この知らせを受けた時に私は、一瞬、『あー、これで天理教もおしまいになるな』と思つた。

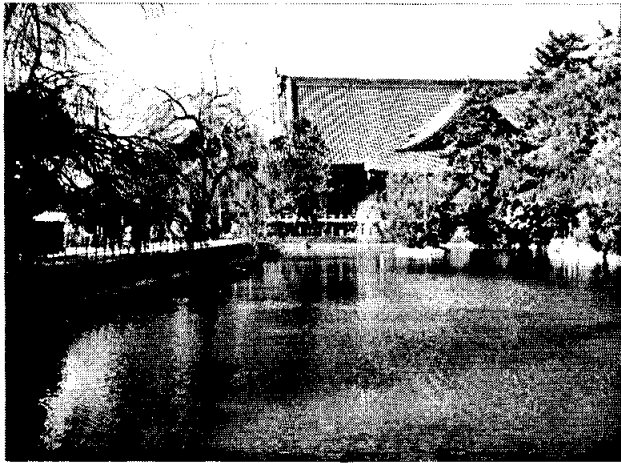
天理教教会本部は、自分たちの教えの主神である天理王命の事をあまりにも知らなさ過ぎるからだ。ここまで資産が増えて、形の上では驚くほど大きくなった教団にとって、もはや、天理王命など居ても居なくてもどちらでも良いのかも知れない。(注)傍線 天理王命は本部が付けた改名で、

本名は天輪王命てんりん おうのみこと

むしろ、七面倒くさい神など居ない方が、自分たちの人間思案だけで、思うように自由に教団を操あやつって行けるから都合が良いのかも知れない。

しかし、これは大変な間違いである。

鏡が池を埋め立て、潰つぶしてしまうなどとは、親神天理王命をも恐れぬ無法者のする事であつて、教祖 中山みきを信じ、教祖の教えを尊守し、教祖の生き様を人間のひながたとして守り、受け継いで行



こうとする真面目な信仰者にとっては、考えられない暴挙である。

鏡が池の歴史は気の遠くなるほど古い。その発生の起点は、親神天理王命が人間創造を具体化された時点にまで遡ると言う事を神から聞かされた事がある。（拙著・近刊『三島神社と天理教』に詳述）

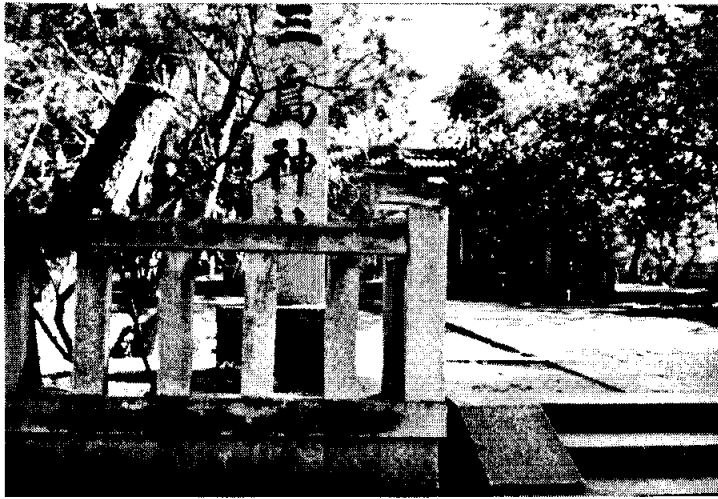
また、ある時、私の友人の霊能者が、天理王命の現状を真剣に天に伺いを立てたところ、大龍の姿をした親神くにとこたちの命が今もこの池に生息している状を見せられて驚いたことがある。けだし、くにとこたちの命は水をつかさどる第一の神だからである。鏡が池が、人間宿しこみの元の場所である甘露台の直近に位置する古来からの池であれば、領けることではある。

従って、鏡が池の埋め立て工事を決定し、命じた者は、たとえ真柱であろうと、誰であろうと、その罪の深さをしっかりと受け止めて、責任を取って貰わねばならない時がやがては来るであろう。

本部は、天理教祖百年祭後の昭和六十三年に、昔からの地元住民と熱心な氏子の猛反対を押し切って、金力と、権力と、策略とを駆使して三島神社を本部神殿東前から、三島町のはずれに移転させてしまった。

その十一年後に、今度は、その昔、天理教祖が親神と人間との板挟みになって苦悩の揚げ句、何度も身を投げようとされた教祖の重要な遺跡である鏡が池を、無惨にも埋め立ててしまうとは、一体全体天理教本部は何を考えているのかと言いたくなる。

ただ、結果から見て推し量れば、天理教会本部が、天理教教祖伝の中の、もつとも重要な部分、つまり、立教の前後の史跡をすっかり消滅して、葬り去ろうとしている事だけは明らかな事実である。



本部がなぜ、そんなに、三島神社とその宮池である鏡が池を邪魔者扱いするのか、なぜそんなに嫌うのか、私には全く分からない。

存命中、教祖が、天保九年十月以降、親神様の社となった事による人間的苦悩の上から、数回にわたり鏡が池に飛び込み自殺を図られた事は歴史上の事実であって、つい最近までその事跡が池の端の案内板にも書かれていた事を、見て知っている人も多くいる筈だ。

この事実が、天理教教祖の神格化を妨げるマイナスの材料になるからだと言うのだろうか？ 教祖の神としての權威が落ちるから、三島神社とその宮池は跡形も無く、八町四面の地場やしき内からは葬り去りたいと言うのが天理教教会本部の真意なのだろうか？

あるいは、もう一步踏み込んで、一派独立している天理教の地場神域に、昔から在ったとは言え、他宗教の神社及びその宮池がある事はどうも目障りだし面白くない。そこで、神社はどかし、宮池は埋め立て、両方ともすっきりと更地にしてしまいたい、とでも云うのであろうか？

もし、そうだとしたら、とんでもない思い上がりであり、行き過ぎた行為であると言わざるを得ない。

教祖から出された神の言葉、並びに教祖の生き様（伝記）及びそれにまつわる重要な遺跡は、たとえ毛一筋たりとも改竄したり、消滅してはならないのである。

今の天理教教会本部のやりかたは、天理教教祖の教えを真剣に勉強しようとする後世の求道者達に、教祖のひな形の真実を隠蔽してしまい、消し去ってしまうのであるから、『ひながた通らねばひながた要らん』とまでおっしゃった教祖のひな形に対する思いに対しての大逆行行為になることだけは間違いない。これは、いかなる理由があろうとも、してはならない事だと私は思っている。

教祖百年祭の三年前、昭和五十八年五月。未だ教内の何処にも三島神社移転の噂話すら出ていなかった時に、真柱を中心とした本部の最高幹部が密かに三島神社移転の計画案を練っている事を、私はある宗教の教祖を介

して神霊から知らされた。（『三島神社と天理教』に詳述）

神霊は、教祖中山みきが、本部における移転計画の秘密会議を見聞して、非常に驚き、怒り、深く悲しんでおられる実情を私に教えてくれた。その際、私は神からの命令で、

『教祖をこんなにまで悲しませていては天理教の将来に大変な悪影響が出るので、直ぐに真柱に三島神社移転案の撤回^{てっかい}を申し入れて貰いたい』旨、仰せつかった。神社移転の話は私にとっては初耳であつたし、神直接に仕事を命じられる事自体、正に驚天動地の出来事であつた。

三島神社の移転話は、最初はまゆつばな話と疑つて居たが、日が経つにつれ、それが事実であることが判明し二度驚かされた。

『これはただ事ではない。正に神のお知らせだ、と悟つた私は、中山善衛三代真柱に直接電話し、緊急会見を申し込んだが、電話番号は、「真柱様は只今、一寸席を外しておられます」と云うばかりで取り次いで貰えないので、仕方なく電話番号に伝言を託し、取り次ぎを期待したが、一週間経つても真柱からの返事は来なかつた。私は再度同じように電話した。しかし、この時も全く同じ状態で、私からの伝言は、真柱室長で破棄されたらしく、真柱からの返事は一ヶ月経つても来なかつた。私は、天理教に於いては、真柱は、我々一般教会長からは全く手の届かない雲の上の人なのだ—と云う事を、この時つくづく実感した。仕方なく私は移転反対の陳情文を作り、これを真柱始め多くの上層部の先生方に郵送し、一般の人々にも配布して、広く神社の移転反対運動を展開した。しかし、本部は、この私の陳情に耳を貸そうとしないばかりか、私の行為が失礼千万であると云うかどでお怒りに触れ、大教会を通して無理矢理詫び状を書かされた。

その後本部は、自ら持てる金力と権力とあらゆる策略をめぐらして、ついには三島神社を教祖百年祭後の昭和六十三年に移転させてしまった。

その際、神霊は言つた。

『万一、金と力と策略で三島神社を移転したら、その首謀者は、遠からず命を取られるか、病に倒されるだろう』と。更に『そんな事したら天理教は今後だんだん衰退して行くだろう』と。

そして、正しく、神社移転後、直ちに首謀者の一人、当時天理教教会本部内統領であつた中山正信本部員は、未だこれからと言う年齢で出直し（他界）されてしまった。その数年後、教団最高責任者の真柱が身上で倒れ、八時間にも及ぶ心臓の手術を二度にまでわたって受けられた事は、教内外多くの人の知るところである。

又、残すもう一人の首謀者である当時の真柱室長 喜多秀義本部員も、神社移転後、時を経ずして脳溢血で倒れ再起不能となつてしまわれた。（その後他界）この事実を見ても神霊の言う事に嘘はない事を思い知らされた。

そこへ来て今回の三島神社宮池の埋め立てである。だから、私は、この報らせを受けた瞬間に、今度は天意により遠からず天理教教会本部そのものが潰される日が来るな、と思つたのである。

冒頭、私は、天理教教会本部が、あまりにもその教えの主神である、天理王命の事を知らなさ過ぎると述べたのは、近年とみに天理教教会本部が毛嫌いをしている、三島神社とその宮池こそ、天理王命と最も因縁の深い遺跡であるからだ。

私の体験から得た直感と推論が正しければ、三島神社の祭神、就中布留の御魂（別名 布留の明神）は、天理王命と同一神なのである。

したがって三島神社を移転させたり、同神社と不離一体の鏡が池を埋め立てたりすることは、天理教教会本部が自らの手で親神天理王命を追い出した上に、踏みつける事になり、それはあたかも自らの手で天理教教団の首を締める自殺行為にも等しい暴挙だと思ふのである。考えただけでも恐ろしいことだ。（注Ⅱ天理王命は天なる月日の神の直接のお使いであつて、月日の神と一体にはなっているが、同一の神では無い。三島神社の主神、布留の御魂には、古の御魂の意味も含まれている。人類史上最古の御魂、つまりは人類の元なる親（神）という事である。）

天啓前、文政十一年、中山みきが三十一才の年、母親の乳不足で困つていた近所の赤子（足立照之丞）を預かつて、自らの豊かな乳で育てられた折、預かり子が黒疱瘡に罹り、命の無いところを中山家の氏神である三島



神社に百日の裸足参りをして命乞いの祈願をされた。

その際、我が子二人の命と、更にご自分の命までも神に差し出されて、赤子の全快のみならず八十才までの長命をも祈願された至誠が、布留ふるの明神みょうじんを通して天に通じ、月日の神様の仰せられるには

「とひようもない者が出て来た。とひようもない者が出て来た。助けてやらにやなろうまい。我が子二人の寿命を供え、我が命までも捨てゝいとわんと云う。頼もしい心の者、（世界中に）今一人とあろうまい。とひようもない者が出て来たで。」《教祖存命中刻限のお話・昭和三十一年版『正文遺韻』より》とのお言葉があつて、

みきの人間離れした真実誠の心が天に通じ、この事が発端となつて、以後、中山みきへの天啓へとつながつて行ったのである。

いわば、三島神社の神が、中山みきへの天啓を導き出した、月日の神への取次人であつたと云えるのである。

言葉を変えれば、三島神社なくして、天理教の発生はあり

得なかつたと云つても過言ではない。それほど重要な神を無いがしろにする事は、断じて許されることではない。



→（昭和五十八年十一月二十七日号『天理時報』に掲載の絵図）
中山みきは預かり子の命を救う為に、中山家の氏神である三島神社に百日間の裸足参りをして命乞いの願掛けをした。

では、なぜ、天理教はこんなにまで変貌してしまったのか？ 私は、その一番の原因は、天啓宗教の旗頭はたがしらを担になう天理教が、教祖と、その愛弟子まなでしの本席亡きあとは天啓者が無く、教祖の心とも、親神の心とも、全く交信こうしんが途絶とだえてしまっているからだと思うのである。要するに、神不在の宗教になってしまったからである。いま、もし教祖が生きて居られたら、命にかけてでも、三島神社とその宮池は、移転させたり潰つぶしたりはさせない筈である。

それを、誰はばからず平気であつと言う間に潰つぶしてしまうと言う事は、現在の天理教はもはや、親神の教えと教祖の御心ならびにそのひながたを中心とする宗教の範疇はんちゆうからは逸脱いつだつして、人間の考えだけで組織を運営する一つの企業体けいぎんたいになってしまったと言わざるを得ない。「天理教は宗教では無くなった」と題する所以ゆえんである。

どんなに頭が良くても、人間は神ではないので、大きな考え違いをしてしまう事がしばしば起こるのである。

それでも、天理教教会本部の首脳部がもう少し謙虚であつたなら、いきなり大切な池を埋め立て、しまうなどという大それた事はしないはずである。独断と偏見による失敗は免れたらうと思うのだ。

しかし、今の本部首脳部は、その形の膨大ぼうだいさに象徴しょうていされる如く、あまりにも傲慢ごうまんになり過ぎている。私の様な一末端の小さな教会長の言う事など、全く聞き入れる耳を持っていないし、本部の方針に逆らう異端者を摘発し、それを審判会にかけて、教籍きようせきを剥奪はくだつし、邪魔者を教団から追放する事に神経をすり減へらしているのが精一杯の現状である。

天理教教会本部には、真実まことによる世界救けと陽気ぐらしを旗印にした素晴らしい表向きの顔があるが、それとは裏腹に、宗教家にはあるまじき醜い裏の顔があることを私は三島神社事件でまざまざと見せつけられた。

私わたしの下に集まった恐るべき陰謀に満ちたこれらの資料も取り入れて、私は近々、神社移転に関する事実をまとめた『三島神社と天理教』と題する本を出版する積もりでいる。三島神社の移転と鏡が池の埋め立ては、正に

天理教教会本部の無謀さと醜さを証明した歴史に残る大事件であった。

かくの如き現状の中で、今後天理教教団が救われる道を探すのは至難のわざであろうと思われる。一方、この様な実態が分かり出したら、厭応なく、真面目な信仰者や、求道者達の天理教々団離れが加速して行く事は間違いないであろう。今日の天理教教団衰退の原因は、天理教教会本部の心得ちがいにより帰するところ大であることを申し添えておこう。

最後に、天理教教会本部に、少しでも、教祖の残した真実の道を正しく後世に伝えようとする誠意が残っているのなら、また教祖と親神天理王命に、自分たちの非道極まりない無礼と親不孝を心から詫びる気持ちがあるのなら、教祖の重要な遺跡である鏡が池の埋め立てを直ちに中止して、三島神社と鏡が池を元に復する事を提案するものである。

了

解 説

此の小論文は、表題にも記した様に、今から三年前の平成十一年四月九日に私が書いたものです。それを何故今頃になって発表するのか？ 何故書いて直ぐに発表しなかったのか、と云う疑問に対して応えておきたいと思います。



文中にもありますが、以前、昭和六十三年に本部が三島神社を移転させた時にも私は猛反対致しました。移転反対のリーフレットを作り本部はじめ一般にまきました。その行為に対して私は（本部）大教会から大変なお叱りを受けました。詫び状まで書かされました。その苦い経験があった為、二度目（平成十一年）は、自身の真実な思いを書いていながら発表する事に躊躇したのです。

どうせ、出しても又本部や大教会からお咎めを受けるだけだ。場合によっては今度は教会長を首になるかも知れない。そんな心配も出て参りました。

という事で、書くには書いたが、発表もせずに、その原稿をどこかへしまったまま、いつしか三年の月日が流れ、教務の忙しさにかまけて私はすっかり自分で書いて

た原稿のしまった場所も内容も忘れ去っていました。

ところがたまたま、本年（平成十四年）七月十二日に私の家内が満六十五才になり、老齢年金を貰える年になったので、社会保険事務所にその手続きをしてくれるよう、家内から頼まれたのです。私は困りました。国民年金は十年以上も前に掛金の支払いを打ち切っていたからです。

申請するための古い年金手帳などの必要書類をさがし出すのに三、四日かかりました。家中のあちこちを探し廻ってやっと見つけ出したのですが、その折りに偶然にも、私が三年前に書いたまゝ忘れ去っていた原稿が、ダンボールに詰め込まれた雑書類の中から出て来たのです。

改めて読み直してみても、天理教にとって余りにも重大な事が書いてある。読みながら私は、我ながら良くも此処までの事を思い切って書いたものだ……と苦笑しつつ或る面では驚かされました。それは、今日の天理教教会本部の実状をズバリ云い当てゝいる部分があるからです。また、正常な天理教の信仰者が読めば、狂気の沙汰だと云われそうな常識はずれの激しい文章だからでもあります。

しかし、これは私自身の心底の真実を披瀝した非常に貴重なものだ。このまま投げやっておけば何時かは原稿そのものも消失してしまうだろう。我が身の安泰を優先して、このまま捨て去ってしまっても良いものだろうか？ 私は自問自答しました。

そこで、思い付いたのが、親しい先輩や教友数人に原稿を送って読んで貰い、他人の参考意見を聞いてみる事でした。その結果、これはとても大事な事なので発表すべきだと思う、との力強い返答が返って来たので思い切って発表する事にしました。

私が平成十一年四月に此の小論文を書いたあと、天理教教会本部では次々といろんな暗いニュースが流れ出しました。

翌年の**平成十二年六月二十六日**には、本部神殿で、こともあろうに月並祭の祭典中、大勢の参拝者の面前で、信仰の中心である甘露台への飛び込み事件が起こり、一瞬の間に甘露台が倒され大騒ぎになりました。その為、倒された今までの甘露台は撤去され、新たな甘露台が造り直されました。

その翌年、**平成十三年六月二十六日**には、やはり本部神殿で、月並祭祭典中に道の台である三代真柱様の奥様（天理教婦人会五代会長）が、身体の気分が急に悪くなられ、いまだかつて無いことですが、祭典を途中退座されました。

そして、それから五十日目の同年八月十五日（旧暦 平成十三年六月二十六日）

三代真柱様夫人 中山まさ様は、天理教婦人会の指導者として、最も円熟した満六十五才と云う年齢で惜しくも出直されました。

此の、六月二十六日という日が旧暦も含めて三度続いた理は重大であり、非常に切迫した厳しい天意が込められていることを悟らねばなりません。

つづく、平成十三年九月三十日には、何が原因なのか良く分かりませんが、天理教全体の金庫であるところの天理教維持財団が突然解散してしまいました。これに関する本部側としての理由説明は一切されておりません。一般的な常識からすれば、これは企業の倒産にも匹敵する重大事件です。一部有識者の間では、天理教教会本部が株式投資その他で大失敗し、兆を超す莫大な損失を出したのではないかと云う観測も出ているくらいです。

何れにしても天理教維持財団が、天理教教会本部の金権体質を支えて来た伏魔殿であることは間違いありません。従って、今後、徹底的に、過去にさかのぼってその実態を解明し、全容を明らかにして行く必要があると思います。

翌平成十四年一月には、にほん学術文化研究所が「天理教再生への提言」全二巻を出版、本部は元より教内に広く無料で配布され、大きな話題を呼びました。

同書は、教祖百年祭後、天理教の教勢が急激に落ち込んで来ている実状を、正確なグラフで示し、このままでは天理教はますます衰退の一路を辿るばかりなので、考え方と、組織の在り方を教祖の教えに照らし合わせて抜本的に改めて行くべきではないかと主張。学術的にかつ進歩的内容の真面目な提言書でした。

しかし、これも飯降政彦表統領の指示で、異端扱いされ、ものの見事に切り捨てられてしまい、改革の炎はくすぶったままです。

次いで、平成十四年四月二十六日には、突然天理市の或る地元住民が、土地の立ち退き要求に対して、地主である天理教教会本部を相手に、強硬なる反対声明を出し、本部神殿前の道路で街宣車を使って天理教教会本部に対する批判演説とチラシ配りをはじめました。これには何県かの同和連盟が加担し、当日を皮切りに三ヶ月間も、毎日の如く街宣車で天理市内を走り廻り、天理市民をはじめ、おぢばへの帰参者、おぢばに住む天理教の関係者に対して天理教教会本部の不平等な差別行為に対する批判、攻撃のアピールをしました。その中には三島神社の不条理な移転にまつわる批判声明も含まれておりました。この事件により少なからず天理教教会本部の信用は損なわれました。

また、この事件にあわてて対応したのでしようか、**平成十四年六月十日** 天理教教会本部は、三島神社移転問題に関与したとみられる安野嘉彦本部員（表統領室長）、山中忠昭本部員（当時の経理部長）、山本義和本部員（当時の営繕部長）の三名に現職罷免の命令を出しました。しかし、時すでに遅しの感はまぬがれません。

この様に、おちばでの事態がこの三年間で、年々、月々、険悪な方向に動いている現状を見ます時、これらの根本的な原因として、天理教教会本部の強引な三島神社の移転と、その宮池の無謀な埋め立てに対しての教祖の言葉に言い尽くせない悲しみと残念が、着実に表面化して来ているように思えてなりません。

天理教教会本部は、いま正に、待てしばしの無い深い反省を、教祖と親神様から強いられてるように思います。

諭達第二号の発布と共に、教祖百二十年祭執行への三年千日の活動に入った今、いたずらに年祭を盛大に執行する為の人集めと金集めの活動にのみ力を入れるのではなくて、この機会に心鎮めて教祖の本心を問い直し、誤りは勇敢に改め、教団全体の意識と組織の改革を積極的に進め、本当の意味での「復元」の実をあげるこそ、今、本教に課せられた最大の課題ではないかと思うのです。

最後に、私は、此の小論文に対する天理教教会本部としての正式な回答を、発行日より三ヶ月以内（平成十五年四月二十六日まで）に、天理教の機関紙である「天理時報」「みちのとも」を通して、公式発表して下さる事を強く要望致します。

以上が、私が今回、三年前に書いた此の小論文を一部加筆修正して発表するに至った理由です。どうか叡智ある皆様方におかれましては、従来からの天理教教団内の因習に囚^とわれることなく、心を無にして、此の一文の意味するところを正しく読み取って頂きたく存じます。

（平成十四年十月記）